「広報しながわ」平成２０（２００８）年９月１日号より転載
（イラスト：池原昭治）

【平塚の碑】
この塚は次第に忘れ去られ、いつしかなくなってしまいましたが、太平洋戦争のあと、このあたりをほりおこしたところ、よろいやかぶと、刀剣などの残片がたくさん見つかりました。同じころ、近くに住む人たちがたびたび不吉なことにあうので、伝説を知る人の間で「塚が失われたことによるたたりではないか」といわれるようになり、昭和二十七年（1952）に平塚の碑が建てられました。昭和三十三年（1958）からは、毎年五月に慰霊祭が行われています。

品川（しながわ）昔（むかし）ばなし

荏原

平塚の碑

中原街道にある平塚橋（ひらつかばし）という交差点の西側を南へ行くと、その路地裏には平塚の碑（荏原四丁目）がひっそりとたっています。昔、このあたりには塚があり、次のようなお話が残されています。

今から約九百年前の平安（へいあん）時代、出羽（でわ）（現東北地方）で力をふるっていた清原（きよはら）氏の争いごとを源義家（みなもとのよしいえ）がおさえようとした「後三年（ごさんねん）の役（えき）」でのことです。兄の義家を助けるために京都からかけつけた新羅三郎（しんらさぶろう）（源義光（みなもとのよしみつ））の活躍（かつやく）もあって、戦いは無事におちつきました。「ご苦労であった。わしも間もなくしたら京へ戻るが、おまえはひと足先に帰って休むがよい」

義家の言葉に安心した新羅三郎は兵隊を引き連れ、出羽から京都へと戻ろうとしていました。「もうそろそろ日が沈むころじゃ。夜道を進んでいくのは危ないのう。よし、このあたりで野宿することにしよう」。新羅三郎はこの平塚のあたりで兵隊たちを止め、一晩休むことにしました。

みんなが寝静まり、聞こえてくるのはスズムシとコオロギの鳴き声だけになりました。すると突然、盗賊（とうぞく）たちがあらわれて、眠っている新羅三郎や兵隊たちに次々とおそいかかってきたのです。盗賊たちに立ち向かうこともできず、多くの兵隊たちはその場で命をおとしてしまいました。

これをあわれんだ村人たちは、亡くなった人たちを葬（ほうむ）り、広さ十坪（約33m²）ほどの塚を築（きず）いたということです。

ほかにも、昔、このあたりに住んでいた「ひらつか組」という野盗を、直江山城守（なおえやましろのかみ）が退治して彼らの武器と一緒に埋めたのが「平塚」だという説もあります。